

想定流量 40年で1.5倍

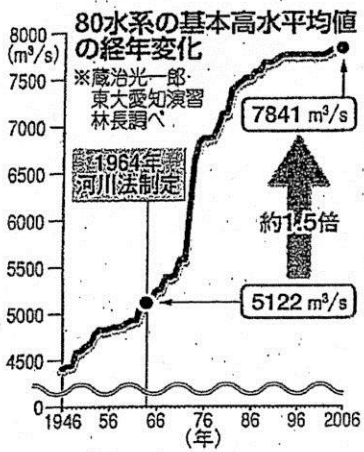
ダム根拠水増しか

東大講師調査

全国の主な河川で将来想定される洪水時に流れる最大流量（基本高水）が、河川法が制定された一九六四年当時からの四十年間で約一・五倍に引き上げられていたことが分かった。基本高水は治水目的のダム建設の根拠の一つ。専門家から「過大設定の可能性もある」と指摘する声があり、国や道府県ダム建設計画の再検証が行われている中、基本高水を見直す必要もありそうだ。

―関連の図面

東京大学愛知演習林 本高水（六四年の前は長の蔵治光一郎講師 計画高水も含む）が確（森林水文学）が、全認できた八十水系の推国百九の一級河川のうち、終戦後の四六年から二〇〇六年までの基



その平均値は、六四年からは約一・八倍に増えている。最も引き上げ幅が大きいのは、ハツ場ダム（群馬県長野原町）建設事業がある関東の利根川で、治水基準地点の八斗島（同県伊勢崎市）の基本高水は四六年の一万立方メートルから、二万立方メートルと二万二千立方メートルと増加。荒川（埼玉・東京）、紀（埼玉・東京）、紀（埼玉・東京）の結果」と説明する。また、過去の洪水で流れた最大流量の実績と、基本高水との差が四千立方メートル以上ある水系が十八もあった。平均値は七〇〇七五を中心に大幅に引き上げられたが、国土交通省側は「流域の発達水実績から、百年や二百年に一度起こると想定する「確率洪水」を

川（奈良・和歌山）、吉野川（高知・徳島）、淀川（滋賀・京都・大阪など）も二万立方メートル以上増えた。また、過去の洪水で流れた最大流量の実績と、基本高水との差が四千立方メートル以上ある水系が十八もあった。平均値は七〇〇七五を中心に大幅に引き上げられたが、国土交通省側は「流域の発達水実績から、百年や二百年に一度起こると想定する「確率洪水」を

採用したことを指摘する専門家もいる。蔵治氏は「行政側が基本高水を高めに設定し、計画以上の洪水がくれば『想定以上だ』とし、想定内の洪水で被害が出れば『予算の制約で工事が完了しなかった』などと主張して、責任を回避しようと考えたのではないかとみている。